

蜂蜜がおとがい垂る朝々をニュースにまみれ生き  
てゆくのか 加古 陽

三句以下、いそがしい新聞社に長く勤めてきた感慨が  
読者にも伝わってくる。二句切れである。「垂る」を連  
用形にしないで終止形にしたことで、場面としての今朝  
の朝食がクローズアップされたかたちになった。

秋の水すこし手に取り撫でやれば粘土は魚のやうに  
撓へり 野原亜莉子

人形作家である作者には、粘土は親しい素材なのだろ  
う。粘土が一気にやわらかく、しなやかになるイメージ  
が楽しい。私たちは大人になると、ふつう粘土にさわる  
機会はほとんどない。私などもここ何十年も粘土に触つ  
たことがない気がする。なつかしい感触。

主査以外マイクをオフで主査だけは時折衣擦れの音  
がする 奥村知世

博士論文を提出、ズームで発表し審査を受ける場面に  
取材した作。緊張ぶりが読みどころ。作者の発言中でも、  
主査の人のマイクがオンになっているので、その人の身  
じろぎや咳払いなどが、作者の耳にひびく、というのだ。  
ややわかりにくいのが、なんとか分かる。

保管期間長くなりたる在庫らのささやく声の漏るる  
雨の日 佐藤博之

発振器部品とか振動子部品とかの機械部品の保管倉庫  
に取材した今月の一連である。素材そのものの持つ重量  
とか静寂とか、独特のなんとも言えぬ質感が持ち味に  
なっている。やや無謀な擬人法も、言ったような独特の

## 短歌の現在

### No.477 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

質感によってカバーされていると読む。

我のみがリモートゼミの日教室を見ている監視カメ  
ラのように 吉川七菜子

作者以外のゼミ生は教室に出ている、作者だけがリ  
モートで参加しているらしい。参加しているというよ  
り、外野から見ている感じなのだろう。「監視カメラの  
ように」が枠外にいる感じを的確に表現している。

畑には落花ぼつちが並びおり わたしの街の秋の風  
景 高橋佳子

あまり聞いたことがない「落花ぼつち」が主役の一首。  
歌にあるように、落花生の産地である千葉県八街市独特  
の風景らしい。一首前に「逆立ちで畝に並んだ落花生や  
わらかな陽をたつぷり浴びて」とあるように、落花生の  
水分を抜くために、掘り出した蔓についたままの落花生  
を、豆をなかにして円筒状に積み上げ、笠をかぶせたも  
のが、落花ぼつち、だという。ネットにたくさん写真が  
出ている、私も初めて見た。

「遊星」と言う名懐かし夜空には木星土星火星が遊  
ぶ 宮地竹史

大空でゆつたりと遊んでいる星たちの壮大なパノラマ  
が見えるようで、楽しい一首に仕上がっている。結句の  
「遊ぶ」がきいている。天文の専門家ならではの一首と  
思う。かつては「惑星」と同じ意味で「遊星」という語  
が使われていたが、現在は使われなくなっただけらしい。

舌先はガキのままなりハイボール百円ちよいをシン  
クに捨てる 帖佐光浩